

[聞き書き]

多磨全生園における史跡の記憶を記録する

—一名誉園長・成田稔に聞く—

橋本 彩香（国立ハンセン病資料館）

ハンセン病療養所という場所の記憶から日本におけるハンセン病の歴史およびハンセン病問題に対する正しい理解を呼びかける当館独自の事業を創造することを目的に、多磨全生園内に残っているもしくは無くなってしまった史跡等について、名誉園長（当館館長）の成田稔⁽¹⁾に対し、現地での聞き取り調査を実施した。本稿は、第1回目の聞き取り調査⁽²⁾の内容をまとめたものである。

話者の成田稔は1955年から1993年に退官するまでの38年間、多磨全生園に外科医師、副園長、園長として在籍した。1927年生まれの92歳であり、おそらく施設側にいた人物としては、最も古い時代について証言が出来る人物である。日本のハンセン病療養所の実態を後世に伝えていくためにも、聞き取り調査の内容を広く公開するものである。

なお、聞き書きの内容について事実と異なると見受けられる箇所もあるが、当時の日本におけるハンセン病療養所での患者の扱いについて考えていただくことに重きを置き、確實に誤りである部分を除いてそのまま掲載した。また、内容については成田稔本人に承諾を得た。なお、内容の理解にあたり、必要と思われる箇所については（）内に筆者が追記をした。質問者による発言は、文頭に——で示した。原則として聞き書き中の「患者」という用語については、「らい予防法」のもとでハンセン病の診断を受けて療養所に入所した人を指す。同法廃止後は、患者として療養所に入所しているわけではない状況を考慮し、「入所者」とする。

◆所内監房の所在位置

私、あの監房⁽³⁾についてはね、みんな興味があると思うの。だけど監房の所在場所がどこかってことはね、今は本当に分からぬの。だけどこれは確かだ。まずね、これが柿の木、甘柿。落ちてると9月ごろ来ると。（今では木の高さが）ずいぶん大きくなつたけど。この柿の木すれすれにね、2間×2間くらいの配膳室⁽⁴⁾があつたの。この柿を取れるのは看護助手の人だけ。手を伸ばせば（届くところに）柿がなつたの。私なんかが取りに入ると怒られた。こっち（南）側がね、古い外科病棟（第3・4号病棟）。それで、ここにその配膳室。病棟入室（入院と同じ意味）者の食事が来てね、そしてここで配食してたの。そして、この第3病棟の先（西）に廊下をはさんで第5病棟があつたの。この位置に。整形外科の病棟。これはね、飛行機の格納庫。中島飛行場から（小さい方を）ここに持ってきたの。大きい方は公会堂⁽⁵⁾。なんの建物だったのか知らないけど、中島飛行場からもらってきた建物がそこにあつた。これが整形外科、（その前は）初めてここに入園してきた



柿の木

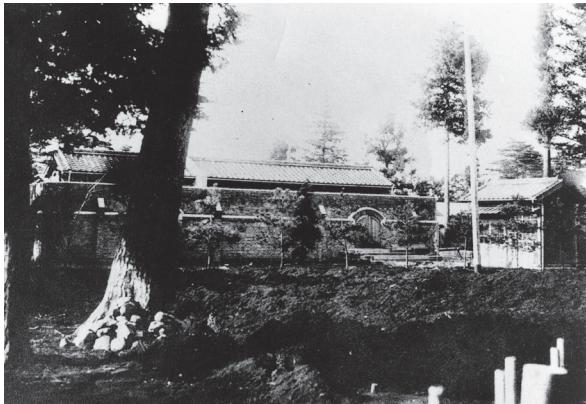
(1) 1955（昭和30）年より医官として国立療養所多磨全生園医務課に勤務。1981（昭和56）年より同園副園長。1985（昭和60）年より同園園長。1993（平成5）年に退官。2007（平成19）年より国立ハンセン病資料館館長。

(2) 2019年7月13日（土）実施。

(3) 1916（大正5）年に「癩予防二閑スル件」の施行規則が一部改正され、所長に懲戒検束権を付与するとともに設置された。

(4) 第3・4病棟（外科病棟）にあつた患者の食事を準備する部屋。

(5) 1953（昭和28）年に竣工。患者運動や娯楽活動など園内のさまざまな行事で使用された。1988（昭和63）年に解体された。



監房の外観



煉瓦塀の内側の様子

患者を入れてた病棟（として使っていたことがあった）。ここに廊下があって、あの第5病棟とつながってた。だからこらあたりに第3病棟があったわけよ、外科病棟が。外科病棟の向かい（北側）に配膳室があるでしょ。だからそこの柿の木が目印なの。柿の木があって、そこに配膳室があつて、そんでこここのところに、第3病棟があったの。

第3・4病棟っていうの。だからあの頃、第4病棟があったんだよ。考えてごらん。なんで4っていうのが・・・普通、病院では4っていうのは使わないのよね。ここに私来た時、本当にびっくりした。なんで4を使うんだろうって。

第3病棟の向こう側（西側）に廊下を隔てて第5病棟があったの。その第5病棟の先（西）にあつたのがね、監房。

新入園患者は、（多磨全生園に）初めてきて、朝起きるね、そして、向こう（西）側に行ってみるとね、こんな建物があるわけ。コンクリート造りの。みんな驚いたって。「これはなんだ」って。「あれは監房だ」って言われて、びっくりしたと（入所者は）みんな言ってたよ。（所内監房が）ここらへんにあったというのを聞いたことだけ覚えてる。間違いなく第5病棟の先。

◆所内監房の様子

この監房の塀⁽⁶⁾はね、幅は10（歳）ぐらいの子どもがこうやって馬乗りになれるぐらい。ちょうど足を広げて。ここ（全生園）の官舎に（住んで）いたSさんが小学校の頃に監房見たっていうんだ

よ。それで、（Sさんは）上にまたがって中をのぞいたって。「本当か」って聞いたら、はしごもつてきて登ったら登れたって。子どもがちょうど馬乗りになれたっていうの。それでね、これはコンクリートでできてて、外側（の外壁）は煉瓦だったみたいだけども。あの（塀の）コンクリがね、磨きのコンクリートだったの。なぜ上が丸くなつてたかというと、（ハンセン病の後遺症であるクローハンド、つまり屈曲指では）手がかけられないのよ。手をかけるとすべっちゃうの。彼らは感じのないところに汗が出ないでしょ。患者さんは汗をかけない。そして手指が曲がってる。だから登れるはずがない。だから塀の上は磨いたようにきれいなんだ。弧状になってる。写真は無いけどね。

最後に入った患者が、柚子か何かを（Sさんに）「投げてくれ」って言ったんで、「投げてやったよ」って。彼はそう言ってた。子どもがはしごで塀によじのぼることができたんだから、（塀は）はしごの高さぐらいだね、せいぜいね。「そのときお前小学校何年生だ」って聞いたら、3年とか4年とかいってたね。だから、11、2（歳）でしょ？ そのぐらいの子どもが、はしごをかけてっていうのはおかしいけど、塀の上にははしごをやって、そして上に登れたんだって。だから、そんなすごい高いもんじゃないよ。

塀の上がね、磨きコンクリート。腕を延ばしても、手がかけられないように、磨いて、まるくなつてたの。（それを聞いて）「へえ～、それは逃げら

(6) 監房の周りを囲っていた煉瓦塀。1950年代前半頃に取り壊された。



田無署留置場便所



金網

れないようにしたんだね」と思ったけども。

◆田無警察署による留置場⁽⁷⁾

——（所内）監房の跡には、看板が建ってましたよね。

あれは嘘。位置は、あの位置じゃないんだよ。なぜあそこにあるかっていいたらね、あれは、（所内）監房を潰したあとに田無署が新しい監房を作ろうとしたのよ。ところがこれは患者の反対⁽⁸⁾にあって、工事の途中で止めた。だからあの監房跡は所内監房を壊してあらためて作った跡。それを間違えないようにしないと。

警察（田無署）の監房はここの先。位置が全然違う。消火栓と書いてある下に水槽がある。この水槽の隣に便所がある。だから実際の場所は（看板より）だいぶ向こう（西側）だ。この下に水槽がある。この水槽を降りて…私はこの辺りだと思うんだが。

——建物の跡みたいなものがあります。

それは便所だ。所内監房を壊した代わりに田無署が監房を造った。だってハンセン病患者なんだから普通の監房に入れられないんだよ。あの頃は、「これは恐ろしい伝染病だ」ぐらいの気持ちなんだから。田無署にしてみれば、ここの患者は田無署に収容することは出来ない。だから新しい監房

を造らなければならない。そしてここに造ろうとした。便所も造った。それで便所だけが残った。この便所は、行ってみたらわかるが便器全部に金網が張ってある。便所だけ造ったって理由がよくわからないけど、便所から脱走したんだよ。

——だから金網を。

（昔、所内監房から抜け出したという患者に）「何処から出てきたんだ」と聞くと、「便所から」と。便所だから便もあるわけでしょ？どうやるのかと思ったが、みんなそう言うので。便所から逃げられないように金網をひいたと思う。田無の警察署は（患者の逃走を）予防するために便器に金網をひいた。その金網が残っているんだ。だからここに新しい監房を造ろうとしたんだけれども、患者が反対した。そのために田無署は工事が出来なかつた。だけど便所だけは造つた。

——そうしたら、この看板自体も実際には間違つてますよね。

うん、間違ってる。

◆最後の監房

それからこれは大西通り。大西通りの手前からこっち（西）に行くと看護婦さんの宿舎。分かれ道があってこっちに行くんだけど、この手前に「鶏小屋」と呼ばれた建物があった。鶏小屋とい

(7) 1953（昭和28）年、「らい予防法」が新たに制定され（「癩予防法」は廃止）、懲戒規定から監禁が削除された。各療養所内に設置された監房は不要となったはずであったが、1954（昭和29）年6月に厚生省は従来の監房を警察の留置場として使用する移管手続きを完了するよう指示した。多磨全生園ではこれを受けて即座に移管手続きを行った。本文中、成田のいう「田無署の監房」とは、田無署が多磨全生園に設置しようとした留置場のこと。また、1953年には栗生樂泉園の特別病室に代わるものとして、全国で罪を犯したとされる患者を収容する菊池医療刑務支所（熊本刑務所管）を菊池恵楓園の隣に開設した。

(8) 所内監房の移管に反対した多磨全生園入所者自治会は1955（昭和30）年に「留置場設置反対対策委員会」を組織し、工事中止を求めて反対運動に立ち上がった。その後工事中止の状態となっていたが、1956（昭和31）年に田無署は秘密裡に園外の山林に留置場設置の工事を開始。それを入所者が発見し、同対策委は入所者に呼びかけて約200名が現場で座り込み、計画を粉碎した。多磨全生園患者自治会『俱会一処』一光社、1979年・『全患協ニュース』第76号、全国国立療養所ハンセン氏病患者協議会、1956年。

うのは監房のこと。（園は）新しい監房をここに造った。鶏小屋っていうぐらいだから、本当に柱があつて、屋根をかけた程度のもの。鶏小屋は仮の監房。田無署にしてみれば新しい監房を造ってもらわないと困るわけでしょ、田無署にハンセン病患者を入れるわけにはいかないんだから。その頃のハンセン病患者は、さっき言ったように「恐ろしい伝染病」。他の囚人が嫌がつて問題になるに決まっているから、どうしてもこの（療養所）中に監房を造らないといけなかつた。だけど向こう（所内監房）は壊してしまつて、仕方ないからそこに造ろうとしたが、患者の強い反対にあって造れなかつた。仕方ないのでそこに鶏小屋というのを（園が）造つた。本当の“小屋”だね。

——それは木造の建物ですか？

木造だよ。バラックだよ。私も最初はわからなかつた。屋根はあるけど。ビニールみたいな屋根なの。屋根すらそれなんだから、本当の仮小屋だね。鶏小屋というくらいだからバラックもいいところだよね。これを監房代わりにしていた。

◆監房に入った入所者

だけど実際に全生園の患者の中から監房に入れるような患者がどれほどいたことか。これ（鶏小屋）はずつと空いてたんだけど、最後に1人入つた。ほかの療養所で素行が悪いと評判で、それでは一般舎に入れられないとここへ入れた。それが全生園の看護婦を刺した男。包帯材料をくれなかつたという理由で。（刺されたのは）Nさんという看護婦。（その男は）最後は大阪にいたかな。足穿孔症がひどいので、私この間に1回か2回、その治療に行ったことがある。その時、その患者が私に言つには、「先生、俺おふくろ殺したんだよ」と。（当時）その患者は、ハンセン病だということになって、療養所にお母さんが連れていく（ことになつた）。そのお母さんから逃げるために、お母さんを走つて列車から落とした。列車の開いてる所からお母さんを突いたと言つた。「本当か？」と聞いたら「本当だ」と。「お母さん、死んだの？」と聞いたら、「死んだだろ」と。「えー！」と思ったけれども。「だから俺は殺人鬼だ」と言つた。ちょっとびっくりしたが、その男

が入つてた。その男が全生園で看護婦を刺した。

（鶏小屋があったのは）昭和27（1952）年から40（1965）年、50（1975）年あたりかな？私がここに勤めてからは1件だけ別の女性を殺した（事件があつた）。恵楓園に医療刑務支所が出来たでしょ？あそこに送られた患者だ。私もよく事件を覚えてないが、私がここにいた時だつた。向こうに川があつてその川で女性を殺した。どういうわけか知らないが、その女性は患者に体を売つていて、終わつたら金をよこせと。それで首を絞めて殺した。それが全生園で起きた事件の最後。売春行為で金を取ろうとしたから女を殺したんだな。これで凶悪事件は最後。これは殺人事件だから、真っ直ぐ菊池医療刑務支所へ送られた。だから結局最後の監房（鶏小屋）は利用されてない。

◆今、監房の存在から考えること

だからこれ（所内監房）は全然位置が違う。本当の位置はあの外灯よりちょっと向こう（西）側だと思う。さっき柿の木があつたでしょ？あれとこの外灯を結んだちょっと先。だからかなり離れてるね。

私は全生で一番興味のある場所はこれ（監房の所在）だと思ってる。（この看板）は間違っていますとはっきり言つていい。

だからどこらへんかということはあの柿の木だよね。柿の木の手前に3・4病棟の配膳室があつた。その配膳室の先に新しく入つた人を入れる病棟があつた。その病棟のさらに先にあつたの。これは誰も知らないみたいだ。間違いない。私が昭和30（1955）年に（全生園に）入つたとき、「この甘柿ほしい」って言つたら、「ダメ」って言われたんだ。だからあの柿の木は、私にとっては思い出。あの頃私は医者だから、医者が「柿食べさせろ」というのに食べさせないなんてひどい話だと思ったね。だつていっぱいなるんだよ。

今のところ（所内監房や留置場跡地）を、全生園の中で一番興味のある場所だと思いますと（来館者に）説明する。それと収容門と診察室が（この近くにあつたことも）。これは北條民雄を読めばいちばん最初に出てくるからね。だからそのへんをあわせれば話としては非常に興味のある話

じゃないかな。

これはね、物が全然（残って）無い中では、やっぱり監房というのは興味をもつね。監房（の堀）はさっき言ったように上が丸くて手が引っ掛からない。だけど抜け出したのよ。それから監房の写真を見ればわかるが、脇の方に大きな木がある。あの木から（Sさんは）食べ物を中に入れてやったんだ。もうその木がどれだけわからないね。

——療養所には似つかわしくない施設ですよね、どう考えても。

そうだね、監房なんていうのはね。だからこの反対運動はすごかった。昭和30（1955）年頃じゃないのかな。

だからこの柿の木だけ覚えておいて。この向こうにあった。だからその位置をちゃんと承知して話をしないと監房は出てこない。もう全生園にこのことを知っている人はいないんじゃないかな。私が今まで案内して一番興味を持たれたのがこの話。監房の話は何故だかわからないが、みんなが興味を持つ。監房からどこを通って脱走したかと聞いて「便所」と答える人はまずいないね。私も最初便所からどうやって逃げるのかと思った。中に便があるわけだから。その中に落ちて、あとで洗うのかね？それは書いていない。だけど便所を通ったことは確かだ。それをされないように、新しく作るはずであった（留置場の）便器には金網が張ってある。

——便所から脱走したという話は、所内監房での出来事なんですね？それを踏まえて次建てようと思って頓挫したけれども、あれは金網をひいた。

便所だけで本体が出来なかった。全患協ニュースには書いてあるよ。木材が積んであったけどみんな持つて行つたって。最初に留置場を作るか作らないかの闘争がここであった。田無署はどうしても作りたかったの。患者が監房に入れられるのは何か悪いことをするんじゃないかっていう先入観があるわけ。だからどうしても監房は作らなくてはならない。だけど患者にしてみたら、（患者の中に）そんな悪人はいないよ、とそう言うに決

まっている。だから監房は造らせない。だけど監房を造る争議は全国で起こったのよ。全生園、駿河、青松園、愛生園。本当に造ったのは青松園と愛生園も対岸の虫明に。それから駿河も造った。全生園だけがつくってない。

（全生園では）患者が囚人として入ったことはない。よそから来た看護婦を刺した男が（鶴小屋に）入ったことは確か。これは刺したから入れたんじゃない。面会人宿泊所と同じような意味で使った。たまたまその患者がNさんという外科の主任看護婦に包帯の材料をくれと言った。看護婦が「今日は材料を配る日ではない」と言ってやらなかった。

——それに腹を立てて刺したんですね。

だからこれが全生の刺傷事件で最後の犯罪。他のいわゆる犯罪行為は売春行為に対するもの。その患者は殺して捕まっているのだから、最初から九州（の菊池医療刑務支所）に送られている。

◆社会復帰病棟⁽⁹⁾について

この病棟がね、1階と2階があるね、2階は社会復帰病棟だったの。1階の病棟はね、ほら格子が入ってるでしょ。格子が入ってるっていうのはね、ここは精神病患者がいたの。これが最後の精神科病棟といつてもいい。全部（格子が）入っているでしょ。これがね、精神病患者の危険な行動、たたいたり、なんかそのような暴力振るったりはだんだんとしなくなつたけれども、でも精神病患者だからって格子が入れられてる。格子は必要なかつたと思うね、私は。ここの個室が3つぐらいあるのかな、そこに精神病患者入れたの。

——この中は個室になっているんですか。

そうそう個室。個室って言ったって、ベッドが2つ入ってる。それでね、この東の大部屋が老人病棟。それであつちの個室にだけ精神患者を入れた。

——格子が入っているところは精神科病棟と言われ、（格子がない）こちら側は老人病棟ということですね。

(9) 1973（昭和48）年に多磨全生園内に発足。多磨全生園の看護師を中心に患者が「一人でも多くの人がより障害の少ない状態で、それぞれの元の生活にもどれるようにする」ことを目標に看護を実践する場であった。高橋シヅエほか「社会復帰病棟の運営を省みて」『看護研究集録』国立療養所多磨全生園看護研究会、1982年。

そうそう、大部屋のほうは全部老人。老人はね個室を使わなかった。個室といったって2人部屋だけど。2階は社会復帰病棟。なぜこういう造りなのかというと、一般の入所患者と交流させないため。この社会復帰病棟の特徴は、園内の一般患者と付き合はせないこと⁽¹⁰⁾。ここだけは独立していて、このことが社会復帰に非常に役立った。この病棟の患者は夜出ることも、家に帰ることも自由。だから家にいてちょっと遊んでくるよ、旅行に行くよと言ってここに来る。だから周りの(近所の)人が誰も(自分が)ハンセン病患者とは知らない。これが心外だが大切なんだ。患者と知らないから一人残らず社会復帰した。今の外来診療と同じ。沖縄の(ハンセン病の)外来診療は、那覇に行こうと思ったって1晩がかりでしょ?だから那覇行ってくると言って3、4日いなくても、誰も不思議に思わない。自分が患者として知られないということはすごく安心なんだ。沖縄のハンセン病対策がすごく成功したのはそのためだ。名誉回復とは何ですかといったら、中心になることは「俺はハンセン病だ」と言えることだ。(患者は)自分を隠さなくちゃいけない。だけどこの診療形態は全く隠し持つことができた。(基本は)家にいて、(診療に)通うだけだから。それがとても効果があった。沖縄は患者の発生数(の減少)が内地から10年以上遅れていた。それが西暦2000年には、どちらもゼロになった。西暦2000年になるまでに10年分先に進んだんだ。理由は外来診療で自分がハンセン病だということを言わなくて済む、知られなくて済むということが非常に大きかったということ。偏見と差別がある中で、これが一番大きな問題だったのよ。恐ろしい伝染病ということが明らかにされないで済むということがどんなに大きかったか。国民の大部分が隔離政策を知らなかったわけではない。知っているけど言わなかった。国民も加担した、つまり国民も反対はしなかった。日本の隔離政策のもとで自分が病気だと知られることが怖いんだ。「恐ろしい伝染病」という言葉を使って(患者を)排除してしまうんだから。それは患者が悪いんじゃない、世間



旧精神科病棟の病室の窓につけられた格子

一般が問題なんだ。

◆資料館職員に望むこと

誰だって仲間外れにされることは嫌。自分は(ハンセン病だと)知られたくない、だから隠す。今も依然として隠している。そのところは、隠さざるを得ないような状況に追い込む私たちに問題がある。だから私が(園内を)案内するときにはいちばん最初にみんなに言っている。なぜここに患者がいるのか。患者というのは(現在ではみんな病気は治っていて)入所者だが、これはやはり世間の口が怖いからだ。自分が(故郷に)帰って、「全生園から帰ってきたあいつはハンセン病だぜ」なんて言われたら一家が困る。だから家へ帰れない。そういう風にしているのは私たちに問題がある。私たちがそういう見方をするから患者は帰れない。それをちゃんと(資料館に)来た人に伝えるという事は何よりも大切なことだ。

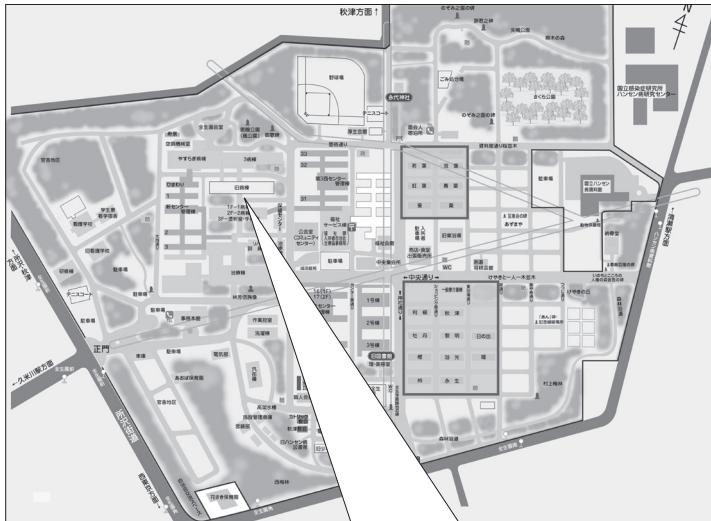
ここは療養所とは言うが、実際は老人ホームと考えていい。入所者はここに居ようと、どこに行こうと自由であるし、本当なら最期を見取ってほしい身内の所に戻りたいと思っている。でもそれができない。それはなぜかといえば、いまだに私たちがハンセン病は恐しい病気でないと分かっていないながら、避けようとしているから。ともかく、病気と人は全く別。その病気にかかっただけで、病気どころか、かかった人までも嫌うなんておかしいと思わない?でも嫌われていたから、療養所に監房なんてものが造られた。

(10) 療養所入所者と付き合はせない理由は、社会復帰を目指す患者・回復者が療養所の生活に慣れて社会復帰の意欲を喪失しないようにすることが目的であった。

どうかこのおかしさに気付いてほしい。怖い病気ではないと頭では分かっていても、感情では嫌っている。でもそんなことのない明るい世の中になってほしいと思う。というのを私たち（資料館職員）が言わないと駄目。私たちの見方や考え方をなぜこの患者が帰れないかということに重ねて、（ハンセン病に対する）偏見と差別をもつとしっかりと伝えるべきだと思う。

この（療養所の）中を案内するときには、冒頭に5分ぐらいでいいから「これから私が話をするのは昔の話ですが、皆さんにハンセン病のことをもっとよく理解して欲しい」と言って今の話を伝えればいい。そしてこの時代には刑務所に入ることすら出来なかった。結局あれ（田無署による留置場）は出来なかったけど、そういうことがあったんですということを教えていいのではないか。私はそれが一番大切だと思っている。要するに私たちの口が怖いんだ。世間口が。それを患者のせいにしているなんておかしい。だからこれはみんな私たちの世間口が怖くて入所者が帰れない。そのところをよくわかってください。そしてこの病気は普通の病気んですよ、よくわかつてくださいと教えればいい。

（ハンセン病は）今は普通の病気。いくら明かしてもいい病気なのに、依然にして隠すのは一体何ででしょうというのは、疑問としてぶつけないといけない。これはとても大事だと思う。

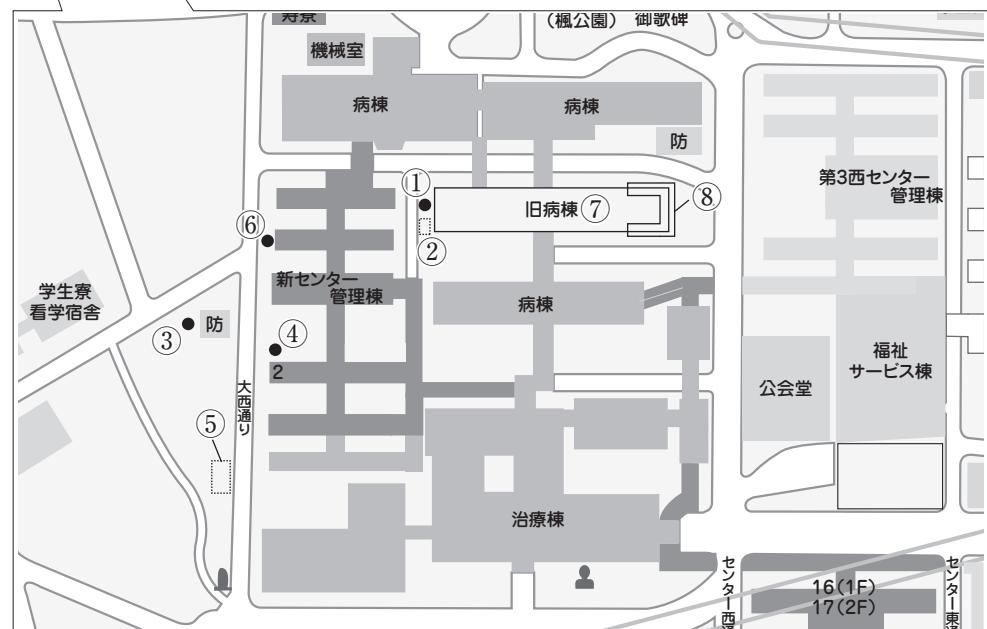


多磨全生園園内図（2020年現在）

[提供：多磨全生園入所者自治会]

（全体図・拡大図とともに）

- ①柿の木
- ②配膳室（推定）
- ③所内監房を示す看板
(成田によると
この位置は誤り)
- ④田無署留置場の便所
- ⑤鶏小屋（推定）
- ⑥外灯
- ⑦旧社会復帰病棟
(旧病棟2階)
- ⑧旧精神科病棟の鉄格子
(旧病棟1階)



1956（昭和31）年当時

[出典：国立療養所多磨全生園『昭和30年年報』1956年]